



# 校長室だより

防府市立牟礼中学校

R3. 1. 8



## 子どもが見える～灰谷健次郎～

校長 田中 俊光

今回の校長だよりは、灰谷健次郎の本「すべての怒りは水のごとくに」から、今でも印象に残っている場面を紹介します。

人間のやさしさが、確実に生命の根元こんげんにふれているものであるということを、わたしは、身体障害をもったひとりの少女から学びました。

彼女は、二百メートルを歩くのに、数十分を要しました。自宅からスクールバスに乗るだけの道のりが、少女が外界と接するすべてのようようでした。だから、あるひとりのおとなが次のような言葉を吐いたからといって、せめるわけにいかないのかもしれない。「ああいう子ども、生きとってなんの楽しみがあるんやろ」少女に楽しみはなかったのか。

少女の登校時間にあわせて、モーニングサービスの看板をかけてくれる喫茶店のおねえさんとあいさつをするところから、彼女の一日ははじまります。「まりちゃん、おはようさん」「おねえさん、おはよう」彼女のような人間を理解しない人には、彼女は、ただ「うーうー」といつているふうにしかりこえない。

少女は一回目の休みを仕出し屋さんの前でとります。猫のクロに、やっぱり朝のあいさつをするのです。ニャーンとクロがなけば、その日はクロはごきげん。なかないときは、余り物があつた日で、ごちそうを食べ過ぎて酸性過多かた。すると彼女はクロに笹ささの葉をやるのです。

二回目の休みを彼女は、まばらに、かん木のはえた野っ原でとります。彼女はハチのシャボン玉といつているのですが、ハチが体内の余分な水分を口から出すのです。パン屋の前を通ると、彼女は、今、ジャムパンをやっているのか、アンパンをやっているのか当てます。パン職人は「まりちゃん、がんばれよ」とときさくに声をかけてくれます。

おしまいの休みは、草花のうえてある家の前でとります。彼女はマツバボタンとあいさつをします。マツバボタンは一つのおしべを右からさわると、残りのおしべがみんな右へ、ならう習性があります。左からふれると左へ、上からふれると上へつぼみます。彼女は誰に教わったわけでもないのに、そのことを知っていて、それを朝のあいさつといつているのです。

彼女がバスストップにつくころ、彼女の前を、朝食を抜いたサラリーマンが、ネクタイの乱れをなおしながら、あたふたと駆かけていきます。幼稚園に行きたがらない子どもが泣きながら親に手を引かれて行きます。彼女はゆっくり歩いているのです。

少女の朝の数十分の生活を知ったとき、わたしは衝撃を受けました。子どものやさしさの意味がなんであるか洞察とうさつできないわたしたちは、「ああいう子ども、生きとってなんの楽しみがあるのか」ということによって、わたしたちは自らを墮落だらくさせ、その精神を貧しくし、あつてはならない、子どもの自殺の状況を作ることに加担かたんしているのではないかと、わたしは、思ってしまったのです。わたしはこの少女によって、「子どもが見える」ということの意味を教えられました。

彼女がわたしのところへ連れてこられたのは小学五年のときでした。筋肉麻痺まひが進行していて、表情というものがまったくありません（そのとき、わたしはそう思っていたのです）。言語障害をとまなっているので「うーうー」と唸うなるように発音するだけで、わたしにはまったく意味がわかりません。すべてのコミュニケーションを奪われ、彼女と接することは、苦痛でした。何をすれば彼女がよろこんでくれるのか、どういうことをすれば彼女が腹を立てているのかわからないのです。

このとき、わたしは、高史明コサミヨシさんのいう「言葉の知恵」だけで、彼女と接触しようとしていたのに違いありません。すべてのコミュニケーションと書きましたが、それは言葉の世界だけをすべてのコミュニケーションと考えていたわたしの傲慢ごうまんさからくるものでした。彼女を理解しようとすると、わたしはわたしのすべての五感を鋭敏えいびんにしなくてはなりませんでした。きつい労働を彼女と共にいと営まねばなりませんでした。それはわたしに、肉体的な苦痛をもたらしましたが、同時に彼女の苦しみいとのいくらかを、わたしはわけてもらって、いっしょに歩むということになったわけです。

二ヶ月ほどたって、わたしは彼女をプールに連れていくことにしました。危険がいっぱいだからと辞退する親を説得して、わたしは彼女を連れ出しました。水を恐がるだろうと思っていたのに、彼女は実に素直に水になじみました。手足を軽々と動かして、はじめての体験を、じゅうぶんに楽しんでいるようでした。わたしの手にささえられてはいましたが、彼女は、プールサイドから、向こうのプールサイドまで、小旅行を完遂かんすいさせました。そのとき、彼女は振り向いて、わたしを見ました。そしてほんとうに美しい笑顔でわたしに語りかけました。かがやいた目が、水にぬれた皮膚が、わたしに確かに語りかけたのでした。わたしは胸がいっぱいになり、**かつて見たことのない世界を見ることのできた興奮にふるえました。**

彼女の笑顔をしっかり胸に刻もうと思いました。そのとき、わたしは、あることに気がついて愕然がくぜんとしました。**彼女の笑顔はわたしに見えている。しかし、プールサイドにいる人々には彼女の笑顔は、笑顔として見えていないのだ**ということでした。かつてわたしがそうであったように――。

見えない子どもが見えるということは明らかに、一つの世界を発見したことにつながるのですが、そのときもう一つのわたしの世界の価値観は変わってしまっています。「**子どもが見える**」**ということの意味は、自分が変わるということです。**見えないものが見えるという世界は、わたしたちの価値観の向こう側にあるものだとすれば、わたしたちは自己を壊す勇氣というものを、人間のもっとも大切な資質として、どうしてももたなくてはならないものでしょう。そのことをわたしは、年端としはもいかない少女から学んだのでした。

（「すべての怒りは水のごとくに」はいたにけん じろう 灰谷健次郎 角川文庫）

## こんなふうに歳をとりたい～遊び心のある人生～

本「倫風」の編集後記に、日本人で長寿の代表者、きんさん・ぎんさんいずみしげち よと泉重千代かみえさんの話が載っていました。きんさん・ぎんさんとは、双子姉妹の成田きん・蟹江ぎんの愛称です。成田きんさんは2000年に満107歳で、蟹江ぎんさんは2001年に満108歳で亡くなりました。また、泉重千代いずみしげち よさんは2012年に満120歳で亡くなりました。

国民的アイドルだったおばあちゃん「きんさん、ぎんさん」には、惚けた味があった。よくテレビに顔を出す二人に、キャスターが尋ねた。「最近ではテレビの出演料がいっぱい入ると思いますが、何に使われますか？」。すると105歳（当時）になっていた姉妹はすまして、「稼いだお金は老後に備えています」。

泉重千代翁いずみしげち よおうも負けてはいない。世界最長寿になった当時、アメリカのTV局リポーターから「女性はどういうタイプがお好きですか？」と問われた。120歳翁おう（当時）はおもむろに答えた。「やっぱり年上の女性かのお」。

この巧まざるユーモアが周りを笑わせる。万事よくよくよせず、楽観的な、笑いのある生活が長寿への秘訣だろう。（「倫風」実践倫理宏正会）